富沢（とみざわ）　赤黄男（かきお）（1902～1962）

俳人。西宇和郡川之石村（現、八幡浜市）出身。本名は正三（しょうぞう）。愛媛県立宇和島中学校（現、県立宇和島東高等学校）を卒業後、早稲田大学在学中に俳句に関心をもった。卒業後、東京で会社員生活を送るが、昭和５（1930）年、川之石へ帰り第二十九銀行（現、伊予銀行）に勤務、会社員として働きながら作句を続けた。昭和10（1935）年、俳句の近代化と革新化を目的とする新興俳句運動の一つとして創刊された俳誌『旗艦』に参加し、評論活動も展開した。俳句という詩型に、現代詩と共通のレベルから新しい境地を拓こうと努め、句風も自由主義的な立場に立ち、季語を超え、口語表現によるモダニズムに傾く。太平洋戦争後は『太陽系』、『薔薇（ばら）』を創刊し、ひたすら新興俳句の道を進み、詩的可能性の限界を追求した。

略 歴

明治35（1902）年７月14日	西宇和郡川之石村琴平に、開業医の富沢岩生とウラの長男として生まれる。
大正15（1926）年	早稲田大学政経学部を卒業。在学中に俳句に関心を持つ。
昭和５（1930）年	帰郷し、地元の銀行員となる。 この頃から『ホトトギス』などに投句するようになる。
昭和10（1935）年１月	日野草城主宰で、俳句の近代化・革新化を目指す俳誌『旗艦』が創刊され、参加
昭和12（1937）年11月	工兵隊の将校として中国へ渡る（同15年帰国）。
昭和16（1941）年８月	処女句集『天の狼』を刊行
昭和17（1942）年７月	北千島などの北方の守備に着く。
昭和21（1946）年	東京で俳誌『太陽系』を創刊
昭和27（1952）年	俳誌『薔薇』を創刊
昭和37（1962）年３月７日	肺がんのため59歳で永眠。墓所は東京都東村山市荻山町の小平霊園

（写真提供：八幡浜市教育委員会）

〈関連図書〉

・富沢赤黄男『定本富沢赤黄男句集』　定本富沢赤黄男句集刊行会　1965年
・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史　文学』　愛媛県　1984年
・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史　人物』　愛媛県　1989年
・富沢赤黄男『富沢赤黄男全句集』　沖積舎　1995年
・四ツ谷龍『富沢赤黄男』　蝸牛社　1995年
・保内町誌編纂委員会『保内町誌』　保内町　1999年

〈ゆかりのある場所〉…（P315，205～206）